
きみの唇に黄昏のメロディ

みねらる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみの唇に黄昏のメロディ

【Nコード】

N4826D

【作者名】

みねらる

【あらすじ】

私が出会ったのは不思議に心惹かれるメロディを口ずさむ少年だった。今でも唇に残る温度と旋律。切ないのはその声が今も私の中の海底でキラキラするから。

第一小節

彼は不思議な少年だった。

今でもあの日と同じ色の空を見ると思いだすのは少し低い彼の体温。

そして同時に

私の口についてこぼれ出るあのメロディ。

唇に残る温度と旋律

.....

私が彼と初めて出会ったのは夕焼けがあまりにも奇麗なとある放課後だった。

その日は高校生活最後のバスケの引退試合に負けた帰り道で、妙な虚無感と達成感がないまぜになったような気持ちで鞆をぶんぶん大きく振りながら殊更ゆっくりとした歩調で歩いていった。

最近では珍しい河原の草道を進みながら吸い込まれそうに美しい金色の太陽を見上げた。

どすっ

「あ」

よそ見をしたために手元が滑り振り回していた鞆を取り落としてしまった。それを屈んで拾うのもなんだか億劫でふわふわとした草の生えるその川辺にごろんと寝転がった。

寝転がった際に制服のスカートが少しめくれたみたいだったがどうでもよかった。こんなところに人もいないだろう。

急にうつと目元に何かがこみ上げて慌てて袖で顔を覆う。

なんだか急に、心に隙間を感じたのだ。3年間打ち込んだものの終りが妙にあっけなく感じたことが寂しかった。

しばらくそうしていて、私はふと自分の耳に聞きなれないメロディが入り込んでいることに気づいた。

いつから聞こえていたのか全く分からないほど自然に私の中に入り込み、浸みわたり、心地よくキラキラ瞬いて沈んでいく旋律。そして穏やかに弾かれるバイオリンのような声色。

今日の夕日のようだと思った。

うつとりしかけて、自分のスカートが乱れていることに気付く。慌てて上半身を起き上がらせると背の高い草の陰に人の後ろ姿が見えた。

その人影は私が立てた物音に気付くとゆっくりこちらを振り返り、私と目が合うと少し驚いた顔をした。

肌の白い、切れ長な目をした少年だった。薄い唇を閉じて私を見ている。

先ほどの旋律はもう聞こえない

ではあのキラキラしたメロディは彼から発せられていたのか。

理解すると同時になんだかのぞき見でもしていたかのような気持ちになって気恥ずかしくなり、彼から目をそらして早々にその場を立ち去ろうとそばに落ちていた鞆を引っ掴んだ。

くるりと踵を返して立ち去ろうとした私の背中にゆったりと歌うように声がかかった。

「今日は夕日が綺麗だね」

まさか話しかけられるとは思わず、驚いて振り返ると彼の薄い笑顔にかちあった。目が合うとわずかに目を伏せ、少し遠目でもわかる長いまつげの影が頬に落ちた。その仕草が男の子相手にどうかとも思うが、綺麗で頼りなげで、庇護欲をあおられるように感じた。

「今日、バスケの試合だったよね」

彼の言葉に僅かに身体が強張った。なぜそれを知っているのかと訝ったが、彼が今日試合で赴いていた学校の制服を着ていることに気づくと多少警戒心は緩んだ。

私が小さく頷くと彼はまた少し微笑んだ。

そしてよいしょと立ち上がると

「かつこよかったよ」

そう言って私に背を向けて逆へ向かって歩き出した。

その背中をぼんやり見送りながら何なのあの人、といかにもつまらないことだと言うように呟いた。

一瞬赤くなった頬には気づかないふりで。

第二小説

教室の窓から抜けるように青い空をぼんやりと仰ぐ

窓際の席は好きじゃない。外の明るさと自分の今いる場所を隔離されているようで、それはさながら独房に閉じ込められた囚人のような気持ちになるからだ。

「青葉」

担任の英語教師に名前を呼ばれてはたと我に返った。

「おい、夏休みボケか？ぼーっとしてる場合じゃないぞ」
お前ら受験なめんなよーと幾分かかった口調でクラス全員に喝を入れる。受験という言葉にわずかに教室の空気がぴりっと張りつめた。

そう、受験生だ。つまらないことを考えている場合じゃない。

そう自分を叱咤してふと思う。つまらないこと？何考えてたんだろ
う私。

ぐるりと思いを巡らし、先日出会った少年の白い顔が浮かんできた
ところで目の前の鉛筆を引っ掴んで頭を一回ぶんと振り、その詳細
を思い出そうとする思考回路の線をぶった切った。

このところ、気付くとあの少年のことを考えていた。
そしてそのあと決まってひどく動揺するのだ。

耳から離れないあの歌が気になった。
何の曲なのか知りたくてCDショップを回ったがそれらしきものは見つからなかった。

あの日以来毎日のように河原のそばを通って帰るのが日課になっている。夕焼けの美しい日にはあの少年の姿をさがしてしまう。別に会って話をするつもりも、まして友達になりたいだとかそんな気持ちにはまるでない。

だけどあの歌を、

黄昏に似たあの旋律を

もう一度聞きたいと思った。

.....

毎日が単調に思えた。

部活を引退し、受験へ向けてのラストスパートをかけて寝ても覚めてもペンを走らせているクラスメート。

受験必勝法を口癖のように語る先生たち。

通学に使う電車の中では朝のラッシュ時にも関わらず、横柄な仕草で他の学生たちや乗客をその大きなお腹でもって押しのけるメタボリックなおじさん。

どれも変わらず毎日あって、いつまでも続くかのような錯覚

かといって実際は期限の決められた、数ヶ月後にはもう見ることはないであろう光景。

なんて儚くて

なんて空しい日常

自分も部活を引退し、さあ明日から追い込みの時期だというのに、その流れに乗る気持ちになることが出来なくて燻った空虚さを抱えて歩いていたあの日、彼に会った。

あの日からすでに一か月。

その旋律は私の心にできた歪みの中にゆっくり溶け込むように、儚くて空しいと思った日常にほんのり色を添えた。

だから聞きたい

きみのあの歌を。

.....

その日もいつものように河原の土手道を参考書の詰まった重たい鞆をぶら下げて歩いていた。

ここを歩くときはウォークマンは聞かない。

イヤホンを外すと外気に耳が触れてほんの少しくすぐったかった。

とたんに耳に流れ込んできた音に全身の筋肉が強張った。

自分の心臓が突然どくどくとありえない量の血液を送り始める。

ぐるりとあたりを見渡すと先日と同じ背の高い草の陰に、目に焼きついたように離れないあの後姿が見えた。

優しくて儚いのに、どこか強いあの歌

私はどくどくと喚き散らす心臓のあたりの服をぎゅっと掴んだ

うるさい、音が、聞こえないじゃない。

苦しいほどに切なくて泣きたくなった。

彼がゆっくりと振り返った

そして薄く笑う

「青葉さん。待ってたよ」

きみの奏でるメロディーに踊らされる。

きみのシナリオ通りに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4826d/>

きみの唇に黄昏のメロディ

2010年11月20日15時30分発行